ＪＥＣ関連
掲載記事

2023.6~2024.5

JEC
MANAGEMENT CONSULTANT Co.,Ltd.

2023.6.13北日本新聞掲載

滑川高生考案 深層水塩ラーメン

人気 2年で3万食突破

有磯海SAで販売・PR

滑川高校商業科の生徒が考案した滑川海洋深層水塩ラーメンの販売数が、3万食を超えた。北陸自動車道有磯海サービスエリア（SA）・上り線（滑川市栗山）などで販売しており、ミネラル分が豊富で、白エビ風味のスープともっちりした麺が特徴。さらに広く知ってもらおうと、同校商業科の生徒が11日、同SAで試食を交えながらおいしさをアピールした。（藤木優里）

先輩が考案した塩ラーメンをPRする滑川高校商業科の3年生

塩ラーメンは地域資源の活用を目指し、2020年度に当時の滑川高校商業科2年生が考案。滑川沖の海洋深層水から作った塩をスープや麺に使った商品で、21年2月から有磯海SAの土産店に並べたほか、フードコートで販売するなどした。人気商品となり、2年余りで3万食を売り上げた。

11日は、授業でマーケティングなどを学ぶ3年生4人が試食用のラーメンを自ら調理した後、土産店やフードコートを回り、来店客に魅力をPR。試食した人の中には「おいしい」と感想を話し、商品を購入する姿が見られた。

同校の五十島大都さんは「おいしいと言ってくれて良かった」、北田宙さんは「みんな試食してくれて楽しい」と話した。

塩ラーメンは北陸新幹線黒部宇奈月温泉駅（黒部市）や、ほたるいかミュージアム（滑川市）などでも販売している。

北日本新聞 2023年7月11日(火)掲載

滑商 4年ぶりイベントへ

滑商の創立総会であいさつする社長の五十島さん（左）

滑川高 姉妹都市の特産販売

滑川高校商業科は10日、同校で㈱滑商（滑商）の創立総会を開き、10月下旬に市内で開かれるイベントで、滑川市と姉妹都市の長野県小諸市、北海道豊頃町、栃木県那須塩原市の特産品販売に取り組むことなどを提案した。

商業科は毎年、模擬株式会社を設立し、実習として商品開発や姉妹都市の特産品販売に携わっている。新型コロナウイルスの影響で、2020～22年の販売実習は校内で行ったため、校外でのイベント出店は4年ぶり。併せて新商品の開発も進めていく。

総会では、滑商の社長に就いた五十島大都さん（3年）が「皆さんで知恵を出し合い、地域活性化に貢献したい」と意気込んだ。総会には商業科の2、3年約80人が出席した。

総会後、北陸自動車道有磯海サービスエリア上り線の草島亮太支配人が出張販売の現状について講義した。

広報たかやま2023年7月号

まちの体験交流館『開館5周年イベント』

5周年の感謝を込めて左記の期間、制作体験をされた方に、飛騨高山の伝統工芸品や特産品などの景品が当たる抽選券をお渡しします。この機会にぜひ高山の伝統工芸に触れる体験をお楽しみください。

日 7月15日(土)～21日(金)
場 まちの体験交流館(上一之町)
問 まちの体験交流館 ☎70-8290

2023年7月12日(水)高山市民時報

まちの体験交流館が5周年キャンペーン

伝統工芸品などの製作体験ができる「飛騨高山まちの体験交流館」が18日で開館5周年を迎えるのを記念して、指定管理者のジェック経営コンサルタントがキャンペーンを開催。

15～21日の期間中に製作体験をすると、抽選で伝統工芸品や特産品などが当たるほか、同指定管理者の運営する「まるっとプラザ」(本町2)と「高山カフェテラス」(同館内)で使える飲食・購入割引券がもらえる。

2023年7月16日(日)中日新聞

飛騨地域の景品用意 無料抽選会はいかが

まちの体験交流館

飛騨地域の伝統工芸品の制作ができる「飛騨高山まちの体験交流館」(高山市上一之町)は十五日、参加者全員に景品が当たる無料抽選会を始めた。二十一日まで。

開館五周年の記念で、竹製のざる「小屋名しょうけ」、さるぼぼ人形、レトルトの飛騨牛カレーなど地元に関連した景品を用意した。くじは専用の電子端末で引いてもらう。小瀬光則館長は「体験を楽しんで思い出にしてもらいながら、さらにお土産を持ち帰ってほしい」と呼びかけている。(八重樫智)

さまざまな景品を紹介する小瀬館長＝高山市上一之町で

北日本新聞 2023年8月17日（木）掲載

レストランに「富山もよう」

ランチョンマット 黒部峡谷鉄道が採用

黒部 黒部峡谷鉄道(黒部市黒部峡谷口)は、トロッコ電車の宇奈月、櫻平駅のレストランで、富山の自然や文化をデザインで表した北日本新聞のラッピング紙面「富山もよう」のランチョンマットを使用している。

来年の黒部宇奈月キャニオンルート一般開放によって結ばれる立山黒部エリアを紹介しようと、トロッコ電車をイメージした「トロッコ」と、峯雲などで見られるライチョウを描いた「ライチョウ」のデザインを用意。宇奈月駅の52席、櫻平駅の196席にそれぞれ置いた。

同社は「立山黒部を楽しみ、少しでも印象に残してもらいたい」としている。

富山もようは、国内外で活躍するテキスタイル(布地)デザイナーの鈴木マサルさんが手がけた。

「トロッコ」と「ライチョウ」のランチョンマットが並べられた宇奈月駅のレストラン

2023年9月7日(木)北日本新聞

所管処理水放出で県内企業

中国ビジネス ブレーキ

観光・物販 長期化懸念

2023年9月8日(金)
中日新聞

作ろうよ伝統工芸品
高山であすから開し
まちの体験交流館

飛騨地域の伝統工芸品を作る「飛騨高山まちの体験交流館」（高山市上一之町）で9、10日、連続は縁日ごとに続けている体験ブースが一堂に会する「体験交流館まつり」が開かれる。

同館では縁日ごとに2、3の体験ブースを構え、講師が参加者に工芸品の作り方などを教えている。今回は10ほどのブースが並び、本物のしゃくし「有道しゃくし」を彫ったり、木の皮を材料にした容器を編んだりと、より多くの体験ができる。

また8日限定で、好きに筆を走らせて自分だけの文字を書く「己書」のブースを初めて設ける。

パンや焼き鳥、かき氷を販売するキッチンカーも集まる。小瀬光則館長は「開館してからちょうど5年。今後も、皆さんに喜んでもらえるような体験を増やしていきたい。ぜひ訪れて」と呼びかける。（松沢侑香）

体験交流館まつりへの来場を呼びかける小瀬館長＝高山市上二之町で

北日本新聞社 20/32

2023.10.26掲載

滑川高「滑魚」 プロからこつ学ぶ

笑顔で接客 目指せ完売

25、29日出展 グルメフェス 姉妹都市の特産販売

北日本新聞 2023 年 10 月 27 日（金）掲載

先端技術 多彩に紹介

県ものづくり見本市 4年ぶりリアル開催

北日本新聞　令和5年10月31日(火)掲載

麺家いろは タイに新店舗

県内外でラーメン店「麺家いろは」を展開する天高く（射水市戸破・小杉、栗原潤代表取締役）は11月2日、タイ最北の都市、チェンライに新店舗をオープンする。ジェック経営コンサルタント（富山市婦人船町、山嶺孝社長）の現地法人がフランチャイズ方式で運営を担う。

大型ショッピングモール「セントラルチェンライ」の2階に出店。看板メニューの富山ブラックラーメンを中心に約10種類のラーメンを提供するほか、50種類以上の居酒屋メニューをそろえ、夜はラーメン居酒屋として営業する。出店はタイで3店舗目となる。

2023年11月15日(水)富山新聞

アンケート結果漏えい

県ものづくり見本市受託業者

1社分を誤送信

県は14日、「TMeeee 県ものづくり総合見本市」の業務委託業者であるジェック経営コンサルタント（富山市）が、見本市に関する出展者1社のアンケート結果を誤って別の出展者3企業・団体に電子メールで送信したと発表した。

県によると、同社は13日、出展者アンケートに本団体の企業・団体に加筆を加す電子メールを送った際、本来含めるべきアンケートの様式ではなく、すでに回答されている1社の結果を添付した。10月26～28日の見本市開催中における商談や名刺交換の件数、出展の目的や満足度などが記載されていた。アンケートには、約1社以外の企業・団体名は記載されていない。

13日に、メールの誤行送から同社に問い合わせがあり発覚した。同社は実行委事務局の県に報告し、情報の漏えい生を謝罪し、情報の漏えいした1社に謝罪した。送信先の43企業・団体にはメールの削除を依頼した。

県が同業務の止めを命じ、実行するよう指示を出したのに対し、同社はメールを送信する際には添付ファイルを開いて内容を確認し、アンケートは回答者が検索かかるようにする措置をとるとし、けて別のフォルダで保存するなどの措置をとるとした。同社ホームページにこの状況を謝っておわび申し上げる。情報を取り扱う際すべて、全力で対処する」とのコメントを寄せた。

2023年11月2日(木)北日本新聞

まちづくり会社設立意義考える

検討シンポ

魚津

魚津まちづくり会社（仮称）設立検討シンポジウムが1日、魚津市の魚津商工会議所であり、先進事例を参考に設立の意義やビジョンについて考えた＝写真。

2025年度の立ち上げに向け、市や商議所などでつくる設立検討委員会（会長・四十万隆一副市長）が開き、関係者ら約70人が参加。国土交通省北陸地方整備局と経済産業省中部経済産業局の担当課長が中心市街地活性化の動向や支援施策などについて講演した。

パネルディスカッションでは先進地のまちづくり武生（福井県）の龍田光幸取締役、にぎわい宇部（山口県）の藤村雄志社長、村椿晃市長が山瀬孝ジェック経営コンサルタント社長のコーディネートで意見交換。越前市副市長でもある龍田さんは設立の意義についてスピード感を挙げ「機動的に動ける会社の存在は大きい」とした。藤村さんは「まちづくりは人づくり。若い世代はまちづくりに関心を持っており、人づくりの仕組みが大切だ」と訴えた。

2023年11月15日(水)北日本新聞

県の委託先がメール誤送付

県は14日、県ものづくり総合見本市（10月26～28日）の委託先事業者が、出展者のアンケートの回答を他の出展者にメールで誤送付したと発表した。

委託先事業者はジェック経営コンサルタント（富山市奥田新町）。県によると、見本市の成果を尋ねるアンケートに未回答だった他の出展者に対して13日に回答を促すメールを送った際、既に回答していた1者のアンケート内容を誤って添付した。

誤送付したアンケートには、商談や名刺交換などの件数、出展の目的、満足度に関する回答が記載され、社名の記載はなかった。

同社は回答した出展者に電話で謝罪し、43者にはメールの削除を依頼した。同社はホームページで経緯などを説明し「従業員に対するセキュリティ教育を徹底する」とした。

2023年12月1日(金)北日本新聞

魚津市の台湾交流先 3自治体に絞り込み

台湾の都市との交流・提携を目指す魚津市は、候補自治体を3カ所に絞り込んだ。30日に市役所で調査報告会を開き、各自治体の特徴を紹介した。本年度中に現地調査し、交流内容などを協議する方針。

交流・提携先候補は、台湾北西部に位置する苗栗県、西北部の新北市板橋区、東南部の台東県。調査委託を受けたジェック経営コンサルタント（富山市）が、主要産業、地理的特徴、魚津市との共通点などを基に台湾の244自治体を評価し、自治体ヒアリングなども行って3カ所に絞り込んだ。

報告会では、同社の山瀬孝社長らが交流の意義、3自治体の概要、期待される取り組み事例などを説明した。

引き続き、台北駐大阪経済文化弁事処の洪英傑処長が「台湾の最新情報と台日関係」と題して講演した。

高山市民時報 2023 年 12 月 1 日（金）掲載

市議会定例会が始まる
補正予算など66議案

市議会の12月定例会が1日から始まり、市は市特別職や市議の期末手当と市職員の給与を増額する条例改正、総額19億8千万円の今年度一般会計補正予算案、公共施設136施設の指定管理者の指定、高根多目的センター新築や大八グラウンドサッカー場整備などの請負契約締結など66議案を提出した。各常任委員会で審議される。

このうち期末手当の年間支給率はいずれも0・1月分増で、市長は11万5320円、市議は4万9920円の増額。

また、指定管理者の指定では、130施設が更新で、6施設が新しい指定管理者に。荒川家住宅（丹生川町）が丹生川まち協、飛騨たかね工房と野麦峠お助け小屋、塩沢温泉七峰館（いずれも高根町）、飛騨民俗村（上岡本町1）が㈱ジェック経営コンサルタント、ジョイフル朴の木（丹生川町）が協同組合朴の木平に変更する。

2023年12月19日(火)北日本新聞

KOKOくろべ 指定管理者交代

黒部

道の駅KOKOくろべ（黒部市堀切）の指定管理者が、2024年度にJAくろべ（同市）からジェック経営コンサルタント（富山市）に交代する見通しとなった。市が議案を市議会12月定例会に上程した。18日の市議会産業建設委員会では、市側が「事業収支計画書の内容に若干の差があった」と候補者選定の理由を説明した。

KOKOくろべは22年4月のオープン時からJAくろべが運営してきた。契約満了に伴い、市が9～10月に指定管理者を募集。2事業者から応募があり、市選定委員会が候補者を選んだ。期間は24年4月から5年間。施設内の農産物直売所「瑞彩マルシェ」は現在に引き続き、JAくろべが運営する。

市はこのほか、宮野運動公園の野球場を改修しており、24年8月まで使用できないことを説明した。利用者に周知しているという。

柳田守氏が委員長を辞任し、後任に古川和幸氏が選ばれた。副委員長は松倉孝暁氏が就いた。

2024年1月10日(水)富山新聞

ホテル譲渡で基本合意
立山黒部貫光、星野リゾートに

立山黒部アルペンルートを運営する立山黒部貫光（富山市）は9日、立山・室堂のホテル立山を星野リゾート（長野県軽井沢町）に譲渡することで基本合意した。施設の老朽化で改修が課題だった。今後、星野リゾート側と条件や金額、時期などを協議する。

ホテル立山は1972（昭和47）年3月に開業した。標高2450㍍に立地し、6階建て、地下1階で客室は81室備える。アルペンルートと連動し4～11月に営業し、観光客らに利用されてきた。

71年に開業したアルペンルートでは、ホテルの建物や運輸設備の老朽化が進み、改修する必要がある。費用面の負担は大きく、同社では運輸事業に経営資源を集中し、ホテル事業の譲渡先を探していた。星野リゾートは、ホテル立山と同じように国立公園内にある宿泊施設を運営している。

ホテル立山は当面、立山黒部貫光のグループ会社が運営を続ける。将来的に星野リゾートに引き継ぐ。

譲渡する金額や運輸事業は今後も立山黒部貫光が所有、運営する。

2024年1月10日(水)日本経済新聞

ホテル立山の売却協議
立山黒部貫光 星野リゾートと

山岳観光路「立山黒部アルペンルート」を運営する立山黒部貫光（富山市）は9日、同社が保有するホテル立山（富山県立山町）を星野リゾート（長野県軽井沢町）に売却する協議に入ることで両社が合意したと発表した。立山黒部貫光は新型コロナウイルス禍の客数減少で業績が悪化し、事業の再構築を急いでいる。ホテル事業の売却で運輸事業に集中する。

ホテル立山は立山黒部アルペンルート中の観光拠点である室堂にある。標高2450㍍と日本のホテルの中でも屈指の高い場所にある。1972年の営業開始で、81の客室を持つ。売却の時期など詳細は未定で、今後の協議で詰めるという。

立山黒部貫光はコロナ禍で富山県黒部市の宇奈月温泉エリアに持っていたホテルを売却したほか、弥陀ケ原ホテル（同県立山町）の運営を外部に委託した。同社は「立山黒部アルペンルートの開業から半世紀がたち、運輸・ホテル両部門の施設の改修が課題になっている」としている。

2024年1月10日(水)北日本新聞

星野リゾートへの譲渡に向けて施設される
ことになったホテル立山＝立山・室堂

ホテル立山 譲渡へ協議

立山黒部貫光 星野リゾートと

立山黒部アルペンルートを運営する立山黒部貫光（富山市桜町、見角要社長）と子会社の立山貫光ターミナル（同）は9日、ホテル運営の星野リゾート（長野県軽井沢町、星野佳路代表）と、立山・室堂にあるホテル立山の譲渡に向けて協議を開始すると発表した。2～3月に基本合意を結び、詳細な協議を始める。将来的には星野リゾートがホテルを運営する予定。譲渡額は決まっていない。

ホテル立山は標高2450メートルの室堂にある。1972年9月の営業開始から50年以上たち、施設の改修や耐震工事が必要となっている。立山黒部貫光グループは、ケーブルカーやロープウエーなどアルペンルートの運輸事業でも設備改修費がかさむことから、ホテル立山を手放し、主力の運輸事業や、駅のレストラン・売店事業に集中する。

国内外で宿泊事業を数多く手がける星野リゾートと連携することで、国内有数の山岳観光地の国際的なブランドカアップも目指す。

見角社長は取材に「同じ志を持った仲間と協力していきたい」と話した。

ホテル立山は立山貫光ターミナルが運営しており、譲渡後に事業計画が具体化した段階で星野リゾートに引き継ぐ。同社の担当者は「将来的な新たなホテル運営など、具体的な内容は今後検討する」としている。

立山黒部貫光グループは2021年3月にも宇奈月国際ホテル（現グランディオホテル宇奈月温泉）をルートインジャパン（東京）に売却している。弥陀ケ原ホテルは引き続き所有する。

2024年2月17日(土)北日本新聞

池の上でジップライン

太閤山ランドで来春整備

県内3公園事業者決定

県は16日、四つの県立都市公園の魅力向上を目的に「パークPFI」で事業者を募った結果、常願寺川（立山町）、五福（富山市）、太閤山ランド（射水市）の3公園の設置予定者が決まったと発表した。「太閤山ランド」は北陸園芸（石川県）がアクティビティ施設の整備を担い、池の上を飛ぶジップラインやつり橋を造る。来春の完成を目指す。岩瀬スポーツ公園（富山市）は応募者がいなかった。

パークPFIは、公園内で収益施設の整備・運営を担う民間事業者を公募で選定する制度。

常願寺川公園は、県内外の8企業・団体で構成する特定目的会社（SPC）の「常願寺 Riverside BBQグループ」（代表企業・久郷一敏）が担い、バーベキュー施設を核としたにぎわいづくりに取り組む。五福公園は大和リース富山支店（富山市）に決定。カフェを誘致し、市街地に近くアクセスが良いにもかかわらず、くつろげる場所が少ないという課題の解消につなげる。

岩瀬スポーツ公園は飲食店やアーバンスポーツ施設を公募条件に公募したが、応募がなく、今後理由を分析したとする。

事業者がイメージ図として示したジップライン

2024年3月6日(水)北日本新聞

北陸3県の観光情報発信拠点のイメージ

北陸情報発信拠点の名称

HOKURIKU+

大阪 7月開設 教質延伸に合わせ

県は5日、北陸新幹線敦賀延伸に合わせて大阪市内に開設する北陸3県による観光情報発信拠点について、名称が「富山・石川・福井観光情報発信拠点『HOKURIKU+』」（ほくりくぷらす）に決定したと発表した。北陸の山や日本海を表現したロゴマークも公表。7月の開業に向け、PRを強化する。

名称には、関西での認知度向上のため北陸3県名を入れた。「+」は3県による「相乗効果」や「高付加価値な旅」などの意味を込めた。

ロゴマークは、立山、白山などの山や日本海の波をイメージしてデザイン。北陸3県と大阪の旅などに変わっている色を組み合わせて「+」を表現した。

ロゴマークの選定に関わった県総合デザインセンターの柳山雅士専門員は「山の稜線と穏やかな海の波線を取り入れることで自然のつながりが表現でき、北陸のイメージが伝わってきる」とコメントした。

情報発信拠点は JR大阪駅西側で7月にオープンする「KITTE大阪」内に設ける。北陸3県がそれぞれの特産品の販売や観光情報の提供などを行い、敦賀延伸に合わせた観光誘客につなげる。

地域の取組紹介

富山県

CASE STUDY

事例

地域の希少農産物を
活用した商品で
持続可能なビジネスの構築

プロジェクト推進に当たって

STORY

プロジェクトの進行過程

1

2

3

4

VOICE

プロジェクトメンバーの声

富山ならではの素材に
着目したお菓子づくり
新たな試みに挑戦

2024年3月20日(水)北陸中日新聞

お土産包み 名物満載

富大芸文学部×中日本高速道路

有磯海SA限定 きょう発売

2024年3月20日(水)富山新聞

有磯海SAの商品デザイン

富大生 きょうから販売

富大芸術文化学部の学生7人は、北陸自動車道上り線の有磯海サービスエリア（SA）で限定販売している「有磯海 濃厚スイートポテト」のパッケージデザインを考案した。20日から店頭に並ぶ。

富大と中日本高速道路金沢支社の産学連携の取り組みで、19日は担当した岡本知久講師のゼミ生が富山市の富山高速道路事務所で成果を報告した。

「デザインのテーマは富山旅行で、瑞龍寺や庫鄰ダム、富山城址公園、チューリップなど43種類のイラストが容器や包装紙に描かれている。名所や特産品を紹介する4種類のリーフレットも用意した。

森美緒さん（4年）は「有磯海サービスエリアのブランド化につなげたい」と説明した。

富大生がデザインを考案した商品
＝富山市の富山高速道路事務所

2024年4月11日(木)岐阜新聞

「飛騨高山まちの体験交流館」

昨年度、初の１万人突破

2023年度の体験者1万人目となった金沢市の会社員和夫さん(右)とある家族(中央)＝高山市上一之町、飛騨高山まちの体験交流館

飛騨高山の伝統工芸品作りなどが体験できる高山市上一之町の「飛騨高山まちの体験交流館」の2023年度の体験者数が1万75人となり、開館以来、初めて1万人を突破した。

開館は18年7月オープン。一位一刀彫や陶芸、青貝しゅくし、組紐といった伝統工芸品の製作体験などを行っている。

20、21年は新型コロナウイルス禍で休館を余儀なくされた時期もあったが、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」を活用した体験や、人気のユーチューバーやインスタグラマーらによる発信などを目標としていた1万人達成につながった。

3月30日に1万人を突破。1万人目となった金沢市から訪れた会社員和夫さんと息子のめぐる君には、記念品として盆笠が贈られた。

小森光則館長は「次は1万2千人を目標に、さらに体験者数を増やしていけるように頑張りたい」と話した。（五田健太）

2024年4月4日(木)
北日本新聞

業関係進出企業 目立った被害なし

心療内科・精神科・神経内科・内科
駅南あすさ病院

2024年4月19日(金)北日本新聞

菜の花ランチ今だけ

道の駅KOKOくろべ　地場産メニュー続々

名水ポークトーストも

2024年4月24日(水)岐阜新聞

組紐を体験する観光客ら＝高山市上一之町、飛騨高山まちの体験交流館

高山の伝統工芸体感

観光客ら宮笠など制作

飛騨高山の伝統工芸品作りなどが体験できる高山市上一之町の「飛騨高山まちの体験交流館」で2日間、普段は日替わりで実施している制作体験メニューが勢ぞろいする「同交流館まつり」が開かれた。

県条例で定められた毎月第3日曜日の「家庭の日」に原則合わせて、2022年度から年に複数回実施している。本年度は5月18、19日、6月15、16日、9月7、8日、10月19、20日にも開催される。

今回は宮笠や有道しゃくし、組紐、一位一刀彫など10種類ほどの体験メニューが用意され、訪れた観光客らが、楽しみながらこの地域に伝わる伝統技術に触れた。一部では実演もあり、職人技に熱心に見入った。

愛知県から夫婦で訪れ、組紐を体験した女性は「指導してもらえたおかげでスムーズにできた。無心で楽しめました」と話した。（玉田健太）

岐阜新聞 2024年5月2日(木)掲載

野麦峠、待望の山開き

今季の安全を祈願

高山市と長野県松本市境の野麦峠（標高1672メートル）の山開きが1日、高山市高根町の地蔵野麦峠資料館「野麦峠お助け小屋」で行われた。

安全を祈願した山開き＝高山市高根町の野麦峠お助け小屋

お助け小屋」であり、関係者らが今年の安全を祈願した。

野麦峠は、明治時代から昭和初期にかけて飛騨から長野の製糸工場へ出稼ぎに向かう工女たちが越えた峠として知られている。冬期は雪の影響で閉鎖されていたが、4月12日に開通した。17日に長野県側で落石があるとの報告があったため、現在は岐阜県側から長野県側に通り抜けることはできない。

安全を祈願した神事には地元関係者ら約40人が出席。4月から「お助け小屋」のほか、道の駅「飛騨たかね工房」などの指定管理者となったジェック観光コンサルタントの山崎幸生代表は「50年ぶりと聞く厳しい冬を乗り越え、野麦峠の工女節の安全を祈願し、地域の発展に向けて頑張っていきたい」とあいさつ。そのほか、野麦峠観光協会が中心となり発足した「野麦いきさい」を参加者に紹介した。（山田恵子）

中日新聞 岐阜県版 2024年5月2日(木)掲載

高山の「お助け小屋」きょうから営業開始

野麦峠山開き

高山市高根町と長野県松本市を結ぶ、明治・大正時代には飛騨から信州の製糸工場に働きに出る女性が歩いた峠として知られる「野麦峠」（標高1672メートル）の山開きが1日、同町の観光施設「お助け小屋」であった。行政や地元関係者などの約40人が安全を祈願した。

峠を通る国道361号は、冬季封鎖を経て4月12日に一部開通したが、直後に長野県側で落石があり、再び通行止めになった。岐阜県側は通行可能だが、現在は観光客を乗せることはできず、関係者の見通しは立っていない。お助け小屋は3日から営業を開始する。

雪の中を歩く参拝者＝高山市高根町で

1日は神事が続き、高山市の清水雅博副市長が「歴史ある伝統をたくさんの人が楽しめることを願っている」とあいさつ。野麦峠観光のメンバーで、野麦地区に住むから伝わる民踊「野麦イササ」を披露した。（北川裕介）

2024年05月24日(金)中日新聞

工女の格好をして歩く参加者たち＝高山市高根町で

明治の工女しのび

野麦峠まつり

明治から昭和初期にかけ、信州の製糸工場に働きに出た飛騨地域の工女をしのぶ「野麦峠まつり」が26日、高山市高根町にある野麦峠一帯で開かれた。地元の小中学生らが着物を身にまとい、約60人が旧街道などを練り歩いた。

地元観光協会などでつくる実行委が企画。着物の一行は長野県側から登ってきた行列と県境で合流し、記念碑に菊の花をささげた。その後は峠付近にある池を一周し、峠の広場で待ち構えていた来場者に拍手で迎えられた。

真綿の特産品などが販売された会場では、住民らが、峠を越える際に工女が歌っていた「糸引き工女の唄」や、野麦地区に伝わる民踊「野麦イササ」を披露した。

地元の高根町に住む増田英さん(10)は、わらじを履いて行列に加わり「昔は冬に峠を越えていたと聞いた。長靴もなくて、歩くのが大変だったと思う」と話していた。（平田志穂）